子どもたちの生活から

樋口三紀子

<倉橋賞を受賞して>

幼児の生活を眺めていると、常に自然と密接な関係にあることがうかがわれます。

保育所という限られた自然の中でも、わずかな草むらにバッタをみつけ、蝶を追い、子どもたちは元気に遊んでいます。こんな姿をみていて、幼児と自然はどのような関係にあるのだろうか？　そして保育の立場からそれらの関係をどう扱うべきか？　このような考えから昨年の五月研究にとりかかりました。まず保育所内の動物について調査をはじめましたが深い知識もなく、また学生の身分で経験のない私には研究といってもただ子どもたちと共に生活して彼らの姿を観察することが唯一の方法でした。毎日保育所にいっては子どもたちの行動を記録し自然のままの姿を知ることに努力しました。

私にどうしても捕えられない動物を彼らは難なく捕り、あるいは学名でなくともその動物の特徴を彼らなりにつかんだ共通の呼び名で、その動物に親しんでいるのをみて、私はずいぶん多くのことを、子どもたちに教えられました。

研究をはじめて一年半になろうとしていますが、ふりかえってみると、ずいぶんいろいろなことがありました。絵本の内容調査のために町の本屋さんの店先を歩きまわったり、調査用の写真を三百枚作るために、まず現像液の作りかたから学び、八月の暑いさかりにしめきった暗室で焼付の仕事もしなければなりませんでした。でも知らないことを学び、発見していく喜びは、かけがえのない大きなものでした。先生のあたたかい御指導を得て、本当にのびのびと楽しみながら研究を続けることが出来、幸せと感じています。

今年五月、広島で開かれた日本保育学会にはじめて参加する資格を与えられ、保育の道に情熱をもって深く研究していらっしゃる多くのかたがたのお仲間に入れていただき、大きな喜びと共に、私自身の浅く乏しい研究を反省いたしました。私共には身にあまる倉橋賞を思いがけずいただき、小さな研究が少しでも保育の道に役立つように、全力をつくさなければと改めて考えました。

保母としてやっと半年になりますが、まだ日々の保育さえ十分には出来ません。幸い先生の御指導を得て、毎日子どもたちと生活をしながら研究をつづけております。自然観察のカリキュラム構成を目的に、常に子どもたちの生活の中で考え、理想論に終らないよう研究を続けたいと思っております。

（広島・やわらぎ学園保育園）